

## 【がんこちゃん】

なになに、ちっともおそろしいおぼけが出てこないじゃと。

そら、懐爺は話をきいているだけじゃもの。

これでも、じっさい逢ってみれば、みんなおそろしくてのう。

なかでも、【がんこちゃん】はかくべつおそろしかったもんじゃ。

放課後になるときまって、わしらの下駄箱の前に、陣取って動かないのが、【がんこちゃん】でのう。

しかも、相撲取りの十倍はある図体（ずうたい）じゃからのう。

そのせいで、わしらはよく裸足で家に帰ったもんじゃ。

あるとき、【がんこちゃん】を排除（はいじよ）してもらうために、わしらが先生に頼んでみたんじゃが、先生いわく、

「【がんこちゃん】じゃ、どうしようもねえ」

じゃと。

「そこをなんとかしろや」

としつこくいうと、

「何とかして【がんこちゃん】にうらまれたら、生きてはいけん」

というんじゃ。

「そらあ、なさけなくはないかのう」

とうるさくいうと、

「そういうことは、自分でやってみてから、いうもんだろ」

というんじゃ。

たしかにそうじゃ、というわけで、わしらは（といっても三人だけじゃが）【がんこちゃん】に対して、

「そこどけ、そこどけ、じゃますんな」

と口々に怒鳴ったんじゃ。

するてえと、

「どいてもいいけど、みんな食われるよ」

なんて、妙なことをほざいてのう。

「くえわれてもええ、そこどけ、そこどけ」

また口々に怒鳴ると、ようやく【がんこちゃん】はそこをどいて、ど

こかに行ってしまったんじやが、さて下駄箱をあけてみると、そこは得体の知れない、ばけものの真っ赤な口になっているのう。

手を入れたら、手を食われてのう。

三人とも食われてのう。

他の二人は、赤ちん塗れば済む程度じゃったが、わしはほれ、小指一本食われてしもうた。

そしたら【がんこちゃん】のやつ、いつのまにかわしのうしろにいて、そのおそろしかったことといたら、小便ちびったわい。

「おとなになったら、やくざとまちがわれるんじゃないかのう」

わしがうらめしそうにいうと、【がんこちゃん】たら、からんこからんこ笑いながら、

「この際やくざになっちまえばいいじゃん」

と、ひどいことをほざいたもんじや。